

市川健雄さんと化石標本

速水 格 (地質学教室)

市川健雄助手は、40年以上におよぶ地質学教室での勤務を終えられ、この春に停年退職される。16歳の時に傭人として教室に採用されたとのことであるから、理学部の全教官・職員の中で最古参の一人であろう。戦中・戦後の混乱期から現在まで、教務員・文部技官・文部教官と身分こそ変わったが、終始地史学・構造地質学・古生物学関係の講座の底辺を支え、地質学教室の発展に尽して来られた。まだまだ働き盛りなのに、停年制が何ともうらめしい。

市川さんの功績は多岐にわたるが、後世に残るものとしては、何ととっても、小林貞一名誉教授の在任時以来長く続けて来た化石標本の整理作業が重要であろう。花井哲郎名誉教授が古生物学講座を担当されてからは、毎週3日をこの作業にあて、今日まで当教室の関係者が研究を済ませた化石標本を一手に整理・保全して来られた。このほか、木村敏雄名誉教授のもとで始められた構造地質学に関する文献情報の収集・整理にも尽力された。

古生物学は化石標本なくしては存在しえない。その研究目的が過去の生命現象の解明であろうと地質学への応用であろうと、標本への依存度は現生生物学に比べてもきわめて大きいと言えよう。特に研究に直接用いられた標本を適切に整理して保全することは、研究の再現性とそれに対する反論の可能性を保証するものであり、古生物学がサイエンスであるための必要条件となるのである。このことは各研究者が十分に認識している筈なのに、日本の研究機関での標本保全は一般にきわめてお粗末と言うほかはない。当教室でも戦中・戦後の混乱があって、市川さんが整理を行うまでは決して好ましい状況ではなかった。

一般に研究者は1つの研究が完了すると、すぐに次の研究に移る。自分の研究標本を大まかに整理するのがやっとなで、とても他人の残したホコリをかぶった標本を整理してあげるほどの余裕は持ちあわせていない。中には、せっかく整理してある標本を勝手に持ち出して散逸させる不屈きもいる。市川さんのようなキュレーティングを専門とする人がいない機関では、たちまち混乱と紛失が起る。

本学創立以来、当教室の関係者はおよそ600篇の論文に15,000点以上の化石・現生標本を記述した。これらは総合研究資料館の地史古生物部門のタイプ標本室に論文別に配列して納めるようになった。市川さんは、これらを1つずつ論文の図・記載・計測値と照合しながら登録・整理を進めた。私も資料館在任中に10年ほど同室し、多少のお手伝いもしたが、実に忍耐を要する仕事である。市川さんには、標本の欠損の具合とか、ちょっとしたキズが照合の手がかりとなるようで、標本と図版の写真がピッタリ一致した時に無上の喜びを感じるといふ。仕事を愛し、それに徹する人だけが知る喜びであろう。その整理の成果は、合計900ページにおよぶ2冊の標本目録(総合研究資料館標本資料報告、第2号(1978)、第9号(1983))となって刊行された。市川さんが助手に昇進され、学芸員の資格をとられたのも、この業績によるところが大きいと聞いている。

市川さんの行った研究論文別の整理方式は、保全のための労力とスペースが最小限で済み、閲覧希望の標本を直ちにとり出すことができるので、学内外の研究者にきわめて好評である。年間十数人以上の古生物研究者が標本の閲覧に訪れるが、異口同音にこの方式による完璧な整理に感嘆して

帰っていく。おかげで私達も鼻が高い。外国の研究者にも、この2冊の標本目録は“イエローブック”と呼ばれ（表紙が黄色いので）、たいへん親しまれている。おそらく、今後内外でこの方式を参考にして標本保全を行う機関が増えてくるであろう。

このように市川さんは、世界的に見ても模範となるような標本整理を通じて、古生物学の発展に一般の研究者が到底及ばない大きな貢献をされた。退官までの残り少ない日々を3冊目の“イエロー

ブック”の原稿の推敲に打ちこんでおられる姿を見るにつけ、賞讃と感謝の気持ちで一杯である。同時に市川さんの長年にわたる献身的な尽力をひき継いでいくべく、これからの標本保全対策（いまわしい定員削減のために困難に直面している）を早急に立てる必要にも迫られている。市川さんには、ますます壮健で新たな人生を歩まれると共に、これからも標本保全について適切なアドバイスをいただくようお願いしたい。